

## 青梅から世界に向けて

林 英夫 (はやし ひでお/武州工業株式会社 代表取締役)

私たちの会社は東京都西部の奥多摩の山が関東平野に広がったあたり、多摩川の中上流域に位置します。私は生まれも育ちも青梅で、高校までは毎日この景色を見て育ちました。多摩川の自然の中で泳いだり、釣りをしたり、ターザン遊びをしたり、樹上小屋を作ったり、探検に行ったりと遊び道具はいろいろ作っていました。「こしらえる」と言う言葉がびっぴりな手仕事を自然と覚えてきました。



河辺町からの眺望

昨今、子供の運動能力が低下したり、味覚が麻痺したり、会社に入っても指示待ち人間など、確かにそう感じる事も多くなりました。振り返って見ると核家族化して子育てに祖父母がかかわる環境も少なくなり、近年は空洞化で働く場も無くなり、低収入の生活で食べるものまで困窮するケースもあると言う。この実態は改善がすぐにされるものでもありません。少子化に歯止めがかからないのも高度成長期を含めこれまでの生き方の付けが回ってきたという事でしょうか。

会社の仕事を通じて「環境に貢献する事」

は製品の「作りかた」にかかっていると思います。環境・品質・安全衛生・5S・就業時間短縮・男女の雇用・障害者雇用など、さまざまな指標・目標はありますが、全てシンプルに本業の「ものづくり」をする事に行きつきます。

日常の仕事をしていると、「お客様が発注をしてくれる事がすべての始まり」と言う事を忘れてしまい、案外「単純作業」になっていて目先の生産性向上に意識がいき、品質を守るとコストアップになるとか、環境を守るとコストアップにつながるとか、そんな誤った概念が育てられてきてしまったかもしれません。

私たちの会社の生産方式は一個流し生産と呼んでいる「セル生産方式」でロット生産とかライン生産とは違う方式です。ラーメン屋に例えると「一杯ずつお客様の注文に応じて作る」ものづくりです。「変種変量生産」と呼んで、多品種少量生産に変動要素があっても自在に変化できる仕組みとしています。

一個流しの良い所は無駄がないのはもちろんですが品質が工程内で作り込まれる事です。お客様の注文に応じて一個一個「こしらえる」という感覚が生まれて、品質が保証されていきます。また生産のための機械は社内で製作し、あえて自動化は完成させない状態でラインに投入します。

あくまでも仕事をするのは働く人で機械は自分の「手先」の延長です。完成させていない設備を現場に入れ、完成品の機械にするのは働く人です。このようにして「ミニ設備」

を作っています。そこに創意と工夫が生まれ、設計者が考えた以上の能力を持った「手先」に完成をさせていきます。

ミニ設備で作業をし、熟練して行くと「単純作業」ではなく「こしらえる」感覚を持った「多能工」に育っていきます。出来高もノルマも自分で設定をして、材料の注文から検査・出荷まで責任をもって進めてくれる人材へと育っていきます。自分が関わる事で「自律性」と「考える力」を自然に気づかせる事がポイントです。

環境に優しくと大上段にかまえるのではなく、自分達の出来る事から少しずつ継続的改善を進めて、ステップアップして行く事が環境に優しい企業につながっていくと感じています。

このようにして作り込んでいった「ミニ設備」や「ポカヨケ装置」が500台以上稼働して、自分の手先のような感覚で作業をしています。人がやらなければいけない作業と人がやらなくても良い作業を分けて、その分は「BIMMS」と呼ぶITCでバックアップをしています。勤怠・在庫管理・進捗・工程管理・日報・出来高・不良品集計などは手元のタブレット端末で自分の関わる分だけを都度入力をしていきます。

この日常の入力によって自動発注が可能になり、集計が出来る仕組みが動き、わずらわしさを感じずに作業が出来ます。入力のミスはそのまま自分の作業にふりかかってくるので正確に情報を入力する事ができ、信頼性も高まります。

ITCの仕組みは現場での生産を4年間経験したプログラマーが実情を理解して、使いやすい仕組みを構築しました。現在130台のPCやタブレット端末が稼働しています。一回入力をした情報はビックデータとして使い回し、経営的には日々決算につながっていきます。

「東京ビジネスデザインアワード」という

デザイナーのコンペにパイプ加工をエントリーし、デザイナーと組んで開発した知育玩具「パイプグラム」が最優秀賞に選ばれ、この製品がグッドデザイン賞を戴きました。受賞評価で「ものづくりに携わるメーカーとして、次世代の子供達が自らの手を使ってものを作る機会を、高い品質で新たに創出することに社会的意義がある」と考える」「アタマではなく、手で考え、理解するというプロセスは玩具と言うより立体図形の演習模型のクオリティーを感じた」とコメントを戴きました。まさに「こしらえる」という感性を育てる製品になったと思いました。

日本で、地域で、そこに住んでいる人の働く場が有るという事。小さい時から手先を使う人間を育てる事。そこで作る製品がお客様に受け入れられる事。それが一番環境に優しい事ではないかと考えています。



表彰式の様子

(左から林社長、デザイナー小関さん、林取締役)

これからもこの青梅から世界に向けて「ものづくり」が出来るように、働く人と関わってくれる皆様と力を合わせて努力をしていく所存です。